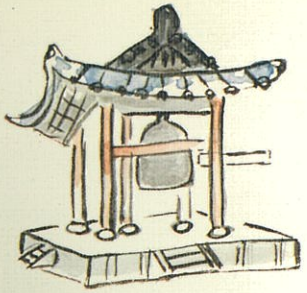
青少年地域活動　ふるさとを見なおそう　第1集

長門昔ばなし

採録　児玉　断

長門町教育委員会

長門昔ばなし　長門町教育委員会



長門むかし話

採録　児玉　断

発刊によせて

私たちの生れ、育ったふるさとの山、川、土地に昔から人々が生活を続けてきております。

その自然と人々の生活の中に、いろいろのお話が言い伝えられ、伝説として残っております。このような伝説は、私たちの遠い祖先の昔から祖父母、そして父母へと、じゅんじゅんに受けつがれ言い伝えられた物語です。

世の中がどんなに変わっても、私たちの生れ育ったふるさとの伝説を大切に次の時代へ申しおくらなければなりません。

青くすんだ空、四季おりおりに変わるふるさとの美しい山や川、この美しい自然を後世に残すこと、そして、その中で育った素朴で誠実な先祖の人たちの心やその物語を後の世に語り伝えることが、現在に生きる私たちの義務と考えます。

テレビからはなれ、家庭の中で、このような昔ばなしをとうして親子、祖父母と孫のふれあいがわずかでもできることを願って発刊するものです。

昭和五十三年二月

長門町教育委員会

お父さんお母さん方へ

物質文化の異常なまでに発達した今日わたしたちは、物質文化の所産に自分の魂を奪われただ現在の生活の快適だけを求め過去をふりかえる余裕をうしないまた未来への希望も失いがちです。

今日の文化を継承し更にこれを向上進展させるために次代の文化を背負う現在の子どもさんが物質文化一辺倒の環境で育てられていることは、前途に何か一抹の不安を感じないわけにはいきません。

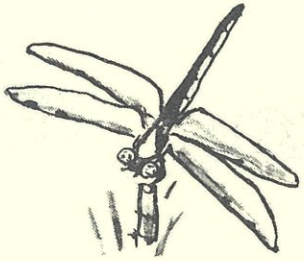
正常な文化の発展は、つねに過去と未来にそなわった規制を受けながら発展すると、いわれます。前述のような世相の中で次第にわすれ去られようとしている「ふる里のむかし話」を掘りおこし収録したことは、意義深いものがあります。

人はとかく多忙になると親子や隣人の心のふれ合いが少なく、ゆとりがなくなりトラブルの生ずる原因になりがちです。心の余裕をみいだすためにも「長門むかし話」はおかあさんと子供さんが、いっしょになって読める、ふる里長門の風土が生んだ楽しい話です。

素朴で誠実な次代を背負う子供さんのために、わたし達の先祖が残した文化遺産を大いに活用されるよう念願いたします。

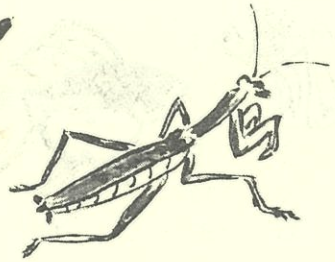
昭和五十三年二月

長門町長　大澤芳夫

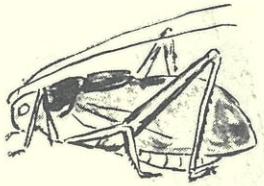


もくじ

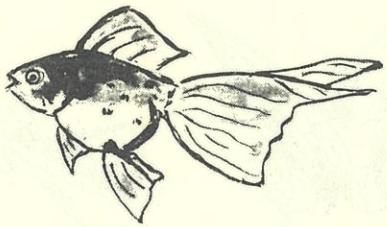
四泊の池……9
かぎ引き石と河童の池……12
またゝび清水と強清水……16
音無川……21
名月と常福寺……25
戸枕山と夕立……28
蓼科山と甲賀三郎……31



丸岩の膳椀……36
観音寺の生仏弘恵和尚さん……40
外山の石碑……43
立岩の駒形……47
与惣塚……53
上宿の観音碑と通夢……56
西蓮寺のはじまり……61



表紙　鷹野原鳳悦先生
口絵の題字　龍野翔雲先生
さし絵　児玉　断



四泊の池

むかし肥後の国（今の九州）に阿闍梨興円というえらい和尚さんが住んでいました。信仰が厚く徳の高い和尚さんでしたから「わたしも長生きして多くの人を救おう。」と、毎日考えていました。

いろ〳〵考えたすえ遠く離れた信州の里に善光寺さまのあることを知りおすがりすることにしました。

さっそく旅の身仕度を整え月参と言って毎月毎月お参りをすることにしました。海を渡りけわしい山の峠道をお念仏を唱えながらひと月も欠

かすことなく和尚さんの善光寺参りは続けられました。

ある夏の暑い昼さがり、はるばる大門峠を越え大門の四泊にたどり着くことができました。和尚さんは肥後の国をでてから四日目に必ずここで泊ることにしていましたのでみんなが四泊りと呼ぶようになりました。

今はあたりが一面のたんぼになっていますがその頃は青くすんだ美しい池があり、大きな松の樹が立っていました。

池のほとりにたどり着いた和尚さんはほっとひと息つい

て、いつものように池の中をのぞきこみました。

いつもだと涼しくなるはずの和尚さんの体は急に火がついたように熱くなりどうすることもできません。

仕方なく一心に念仏を唱え続けました。するとふしぎなことが起りました。水の面に映し出された和尚さんの姿はみるみるうちに蛇の姿に変ってしまいました。

そしてそのまま、『ザブン』。と、大きな音を立てて池の底に消えてしまいました。それからはこの池をみんなが四泊の池と呼ぶようになりました。

青く澄んだ池のほとりの松の樹には旅の笠が懸けてあり、その笠には、

「此の国は肥後の阿闍梨の四泊や

其の名も高き笠懸の松」とあざやかに記るされており、それからみんなが笠懸の松と呼ぶようになりました。

お話　内田　貢さん

かぎ引き石と河童の池

蓼科山のふもと、大門村と芦田村の境に赤沼の池があり、池の南側にかぎ引き石と言う大きな石がありました。峠の道も今とはちがって道も狭く通る人もあまりありませんでした。

ある日村人がこの池のそばを通ると、かぎ引き石の上にひとりの子供が

すわっていました。そして『おじさんおれとかぎ引きをしないか。』と言って、太いうでをつき出しました。

村人も面白半分に二人の指と指をかぎにして引っ張りくらべをしました。

するとその子供の強いこと村人はいつのまにかずるずる引きずられ赤沼の池に引っ張りこまれて死んでしまいました。こういうことがたびたびおきました。

こんなうわさを聞いた諏訪の殿様のけらいで立木さまという力の強いさむらいが『よしおれが退治してやろう。』と、馬に乗りかぎ引き石まで来ると案の定子供がいて『おさむらいさんかぎ引きをしないか。』と言った

ので〝ようし〟とばかり馬の上からゆびとゆびをからませると『ピシッ』と馬に鞭をあて馬を走らせました。子供はたまったものではありません。引きずられながら『あいたたあ―助けてくれ―。』とさけびながら、だんだん河童の姿になっていきました。

『おねがいです。命だけはお助けください。そのかわり骨つぎを教えます。』

河童はなんとも言えないあわれな声でたのみました。それを聞いた立木さ

まは、『ではゆるそう。これから悪さをするでないぞ。』と言って、馬をとめ河童から骨を接ぐ秘みつの法と病気をなおす薬の作り方を教えてもらいました。

立木さまは河童に向って、『おまえはここにいて、また悪いことをしてはいけない。今日じゅうにどこかへ行ってしまえ。』と強くいいきかせました。

河童は立木さまにいわれたとおり、とぼとぼと山をくだり和田村の夜の池に移りひっそりと住むようになりました。

それまではいっぱい水がたまっていた赤沼の池はひと晩のうちに水がなくなってしまい、河童が住みついた『夜の池』は、ひと晩で、できあがったそうです。

河童から「骨つぎ」を教えてもらった立木さまの名は全国に知れわたり、「立木さま」と言うことばが「骨つぎ」と言うことばみたいになり、今でも大門のお年寄りで「上田の立木さまへかよってよくなった。」という人もいます。

お話　柳沢周平さん

「またたび清水」と「強清水」

川中島出陣のため武田信玄は隣りの国、甲州から大軍を率いて大門峠を越え、大門の小茂ケ谷の手前広原のあたりにさしかかりました。信玄

はここで本隊をとめしばらく休むことにしました。広原の道ばたにはこん〳〵と湧き出る冷たいきれいな清水がありました。

信玄は部下が汲んで差し出した清水をぐっと飲みほし「よい清水だ。」と喜こび、しばらく休むと、号令をくだし、先をいそぎ大門の中心宮ノ上のあたりにさしかかりました。

その頃の宮ノ上部落は隣の窪城部落とひとつの部落になっていて、部落の高地には明神様がまつられていました。信玄は明神様にお参りするため再び部隊を止めました。

村人たちもてい重に信玄を出迎え、みん

ながだいじにしていた清水をお椀に汲んで信玄にさし出しました。いっきに飲みほして、『これは良い水だ。』とたいへんほめました。

『風林火山』の旗を押し立てて怒濤のような勢いで中部関東にまで手をのばし天下制覇を夢みて京都に向って進みました。

ところが無念にも三河の野田城をおとしいれたころから、信玄は病気になってしまいました。一度甲州に帰って病気をなおしもう一度出なおそうと考え大軍をすごすごと引きかえさせました。

下伊那の駒場（阿智村）まできたころ信玄の病気はますます重くなり、重臣を集め『あしたは風林火山の旗を全部たてろ。』と命令し、信玄はすっかり京都に乗りこんだつもりになり夢うつつのうちに、……『川中島

出陣のとき飲んだ大門の宮ノ上の清水がほしい水、水。』といいました。

重臣が相談してけらいの一人を早馬で水を汲みに走らせました。水を汲みに来た信玄のけらいは馬のうえで考えました。『宮ノ上の水を汲んで帰るまで総大将（信玄のこと）が生きているかどうかわからない。同じ大門の強清水を汲んで帰ろう。』

信玄の本陣からは強清水の方がずっと近かったからです。『殿大門宮ノ上の水です。』差し出された清水をひと口飲み終った信玄は、『これは宮ノ上の水ではない。』と、いいました。病気で夢うつつのうちにも天下の名将は清水を飲みわけました。

ときに信玄五十三歳天正元年（一五七三年）四月十二日死によって天

下制覇の夢はむなしく消え去りました。

信玄のほしがった宮ノ上の水を汲んでこなかったことで汲みにやったけらいに、罰をすることでいろ〳〵な議論がかわされました。

水を汲みにきたけらいは、いいました。『ぜひとも殿様の最後の喜びにむくいるために強清水を汲んできました。この清水も殿が川中島出陣のときたいへん喜ばれた清水です。』と、……

いろいろな意見がありましたが、水を汲みにきたけらいにおとがめはなにもありませんでした。

信玄がまた飲みたいと、いってから、この宮ノ上の清水を『またたび清水』とみんなが呼ぶようになり、広原の『強清水』とともに、とても

有名な清水になりました。

音無川

お話　故　斎藤真十さん

戦国の武将で天下を制覇しようと考えた人々は数多くいます。武田信玄もその一人です。信玄がまず第一に手をつけたのは隣国の信濃でした。その頃の信濃の国は完全に一国が統一されておらず、信玄が勢力を伸ばすにはちょうどよい場所でした。

大軍を率いて信州に攻め入り諏訪郡をおとし入れさらに軍を進め、小

県郡・佐久郡を攻めようとして、大門峠まで進撃しました。

これを阻止しようとした小県・佐久の連合軍と大門峠池の平（いまの白樺湖）で大激戦となりました。

信玄の本隊はその頃西白樺湖の御座岩の付近に陣を取っていました。信玄は、池の平が一望できる御座岩の上に立って采配をふるい部下をさしずしました。

その頃は、もちろん白樺湖はなく蓼科山から流れでる川がゴウゴウ大

きな音をたてて信玄が立っている御座岩の前を流れていました。

村上義清が率いる小県・佐久の連合軍もなかなか強い相手でしたからさすがの武田勢も動揺し、蓼科山から流れ出す川の騒音で信玄の命令が聞こえませんでした。信玄はいらだってきましたが、はやる心をおさえじっと目をつむり、はるかかなたにそびえ立つ蓼科山をおがみ、『どうかこの川の騒音を静めたまえ。』と祈り大きなひとみをかあ―っと開き「うるさい、者ども静まれ。』と雷さまのような声で一喝しました。

すると不思ぎなことが起りました。今までゴウゴウと大きな音をたてて、蓼科山から流れ出していた川の騒音がピタッとやみ、信玄の命令が部隊のすみからすみまで行きわたり、池の平の大合戦は武田軍が大勝利

をおさめることができました。

それからは池の平のまん中を流れていた川を「音無川」と呼ぶようになりました。

（静かに静かに池の平を流れていた川も戦後茅野市池の平改良区の人々によって、川は、せき止められ、白樺湖に生まれ変わり、音無川は湖の底に沈んでしまいましたが青く澄んでそれはきれいな川でした。）

お話　児玉　修さん

名月と常福寺

今から三〇〇年余りも前のお話です。名まえを『鉄眼長印禅師』という和尚さんが、諸国を回って「修業しよう」と思い、大門をとおって諏訪の方へ向かおうとしました。

つるべ落しの秋の日はすでに西の山にしずんでしまい、あたりは暗くなってきました。どこかに泊まろうと思ってあたりをさがすと、観音堂がありましたので、村人たちにお願いして泊めてもらうことにしました。

お堂に泊まると向いの東山名呉から出る仲秋の名月は、めったに見ら

れない美しさでした。「月で有名な更科の鏡台山の月も比較にならない。」と、和尚さんはとても喜び、しばらく観音様にお経をあげて、そこに泊めてもらい、つぎの朝また修業の旅にでました。

こうした和尚さんの諸国修業の旅は二十数年も続けられ、青木村の龍仙寺というお寺の住職になり、なんねんもつとめてからそのお寺をやめましたが、どうしても名月の思いで深い大門の地をわすれることができませんでした。

『もう一度たずねてみよう。』和尚さんは思いきって大門の地に再びやってきました。

大門の人たちは人情の厚い人たちでしたから、和尚さんをしたってとてもだいじにしましたので、和尚さんは、ここにお寺を開こうと考え、大勢の人の協力を得て、無事にお寺ができあがりました。寛文元年（一六六二年）のことです。

できあがった新しいお寺の名まえは、美しい名月にあやかって、山号を「指月山常福寺」とつけました。

（常福寺は貞享年間、宝暦年間の二度の火災で座禅堂が焼けてしまい、天保八年四月九日には入大門大火によって、全焼して本堂がなくなり、実に三回も火事にあっています。いまの庫裡は天保十五年に再建されたものです。）

お話　二十三代常福寺住職原田恵照さん

戸枕山と夕立

『戸枕山』という山は大門のほうから見ると合戦原と和田村の谷を経て美ケ原に続く山なみの中に尖った三角の山です。この山で日本の神話「天の岩戸物語」にでてくる「タジカラオノミコト」という力の強い神様がお昼ねをした山だと伝えられています。

天の国にからだから光を出すりっぱな女神さまがいましたが、ある日

突然大きな岩穴にかくれてしまいました。さあたいへんです。世の中が真暗になってしまいました。

大勢の神様がそうだんして力の強い「タジカラオノミコト」に岩の戸を取りのぞいてもらうと、もとの明るい世の中になりました。

とり除いた岩の戸は下界にはこぶことにしました。戸をはこぶ役を「タジカラオノミコト」が引き受けました。なにしろ天の国から遠い下界の国にはこぶのですから、さすがに力の強いミコトも岩の戸が重いのでつかれてしまいました。

美ガ原のあたりまでくると、「ドッコイショ」。といって、ミコトは、運んで来た岩の戸を枕にグウ〜高いびきでお昼ねをはじめました。

力の強い神さまのいびきですから雷さまのように谷から谷へ響きわたったそうです。それからミコトが昼ねをした山を「戸枕山」と呼ぶようになりました。

真黒なおもくるしい入道雲が村全体におおいかぶさるようになると、きまって大夕立がやってくる。大門の人たちはこの夕立のことを『戸枕夕立』と呼んでいます。

戸枕山のほうからやってくる夕立は荒いせん光と雷鳴がかさなって、滝のような大雨が降ります。『戸枕夕立が来るぞー。』おばあちゃんの大声

にせきたてられて村の子供たちがあわてて家にとびこむ。ピカ　ピカ　ゴロゴロ大雨のあと南の空が雲切れて晴間が顔をだす。

力の強い『タジカラオノミコト』という神さまがお昼ねを終えて今立去ったのかも知れません。

お話　和田村
長門町大門　の皆さん

蓼科山と甲賀三郎

むかし蓼科のすそに小さな村がありました。ここに甲賀太郎・二郎・

三郎という三人の兄弟がありました。三人は若者になりそれぞれお嫁さんを迎えました。

ところが末の三郎のお嫁さんは、とっても美しいお嫁さんでした。二人の兄は『三郎の奴あんなきれいなお嫁さんをもらって生意気だ。』とばかり嫉妬し、三郎を連れ出し蓼科山のいただきにある岩穴にやってきました。

穴は人がやっとはいれるくらいの大きさで、中はまっくらで『オーイ』と声をかければ、その声は、どこまでもとんでいってとまりません。二人の兄は三郎にいいました。『三郎や、この穴は龍宮までつながっている。はいって見ろ俺達も行く。』といって、付近に生えているクゾ葉藤のつる

を集めて藤籠を作り、三郎を藤籠に乗せ岩穴につりさげました。

なにしろ岩穴は龍宮まで続いている穴ですから、あたりに生えている藤づるはみんな取ってしまいました。藤籠がいいかげんさがったとき、つりさげられていた藤籠は、あっというまにすうっとくらい穴のおくにそのまますい込まれてしまいました。

二人の兄が三郎をだまして、藤を途中から切ったからです。三郎は、まっくらな世界を手さぐりでさまよいあるき、力つきて死んだようにたおれてしまいました。

それから、どのくらいたったことでしょうか。ふと三郎が気がついてみると、りっぱなごてんにねかされていました。

そこは龍宮だったのです。庭には一年中いろとりどりの花が咲きみだれ鳥がうたいおいしい食べ物がどっさり、お話に聞く楽園そのものでした。

あっと言うまに十三年がすぎましたが、いつも三郎の頭の中からきえないのは、美しくてやさしい妻の顔でした。どうにかして蓼科のふもとにかえりたい、大勢の人がとめるのも聞き入れずわかれをつげ、すこしも休まず闇の中をひたすらあるきつづけました。

やっと待ちに待った地上近くまで来ると頭の上がぽうっとかすんでいたので、そこから

抜け出そうとすると、それは浅間山のふもと小沼（御代田町）にある真楽寺の池で三郎の体はいつの間にか、蛇身（へび）になっていました。

三郎はへびになった自分の姿をみてかなしみましたが、蓼科をめざしてまっしぐらにのぼりました。蓼科山のてっぺんにたった三郎の体は岩にぶつかり木の根につきさゝり血だらけでした。身も心もつかれはてた三郎は大声で妻の名を呼びながらたおれてしまいました。

そのとき遠くの方から細い女の声で『三郎さーん。』と聞えてきました。その声は恋しい恋しい妻の声だったのです。『三郎だよ、三郎だぞ。』いうが早いか三郎はガアーと空にとびあがり龍の姿にかわりひとっとびに空をつっ走り諏訪湖のまん中へバシャンととび込みました。

まえに三郎を蓼科山でうしなった妻は悲しみのあまり龍になって湖の底にさみしく住んでいたのでした。

二人はいつまでもいつまでもだきあっていました。

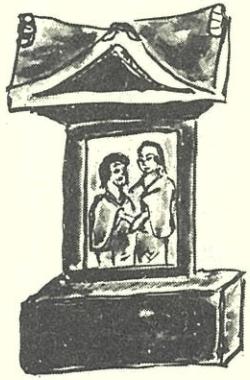
お話　故　児玉　基さん
　　故　児玉　稽作（わたしのおじいさん）

丸岩の膳椀

蓼科山のつめたい風が吹きおろす谷間の村は、霧ケ峰や蓼科山から流れ出す何本もの川が村の入口でいっしょになり、水にめぐまれ、たんぼを作るのにとてもよい住みよい村でした。

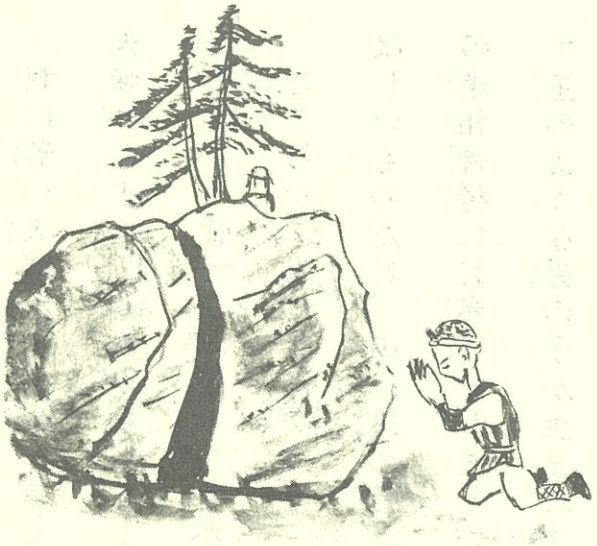
村に若い夫婦が住んでいました。二人はまずしかったが働きもので、夫婦仲もよく、子供が川におしっこなどすると『ちんぼがまがっちゃうぞ。』というように、とっても水をだいじにしました。

ところが二人は子供がなく、なんとか子供がほしいものだと、田んぼの行きかえり村はずれの道祖神様にお参りをしました。念願がかなって玉のような男の子が生まれました。『親類や近所の人を呼んで赤ちゃんのお祝をしたい。』でも、うちには、お客に使うお膳やお椀がない。三十人分もそろえるのはとてもむりでした。



すっかり、しょげてあきらめていましたが、あるとき夫婦は同じ夢を

みました。『わたしは水の精の使いだが、お前たちはいつも水をだいじにしているのでお客に使うお膳やお椀はわたしがかしてあげます。夕方いるだけの数を紙に書いて丸岩の割目に投入れなさい。』まっ白な着物を着た美しいお姫様がそういったかと思うと煙のようにきえました。



姫のおつげのとおり「お膳とお椀を三十人前おねがいします」と書いて、丸岩の割目に投入れました。さっそくあしたの朝でかけて見ると、丸岩の前に三十人分のお膳とお椀が、きちんと

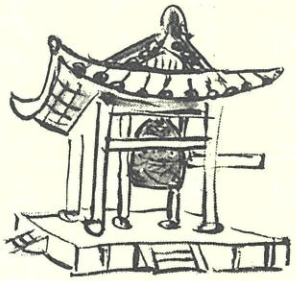
並んでいました。さっそく赤ちゃんのお祝をすませて、夫婦はお膳やお椀をきれいにして同じ場所にならべ「大事な物をどうもありがとうございました。」とお礼をいうと、いつのまにかまた岩の割目の中へすうっと消えてゆきました。

若い夫婦は村人に知らせました。村人たちも「二十人前」「三十人前」と紙に書いて同じようにやると、やっぱりお膳とお椀をかしてくれました。

村人たちは、ちょうほうがってつぎつぎとおねがいしました。ところが、そのうちに、わるいやつがいて五十人前かりて四十九人前だけかえし、しらん顔している人がありました。それいらい、いくらたのんでも、ぜったいかしてはくれませんでした。

お話　児玉一夫さん
入大門のみなさん

観音寺の生仏弘恵和尚さん



長門町役場の前の道を五十鈴川ぞいにのぼると左がわに古風なお寺があります。山号を松尾山といって観音寺というお寺です。このお寺に第七代目の住職に弘恵という徳の高い和尚さんがありました。

檀家の人々はもちろん、近くの村人からも生き仏のように尊敬されていました。弘恵和尚さんは火を使わずに食事をする木食に精進し、毎日毎日修業に励んでいましたが、人生の無常を悟り三十一日間も断食を行

ない、「人生は夢まぼろしのようなものだ。百年も長生きすることはできない。私はこれから入定（生きたままお墓にはいる）したいから墓穴を掘ってくれ。」といいました。

いあわせた人々は驚きました。「和尚さんそれだけは思いとどまってください。」とかわるがわる何度も何度もお願いしましたが、和尚さんの意志は固く誰れのいうことも聞き入れませんでした。

仕方なく、大勢の人が集まって墓穴を掘り石室を作ると、和尚さんは大勢の人々に「ほんとうにお世話になりました。」と永の別れのあいさつをし「百年たったら私の墓を掘り返してください。」と遺言をしました。

悲しみのうちに和尚さんをしたう大勢の人々や弟子はもちろん近郷の

和尚さんが大勢でとなえるお経の合唱の中で埋めてもらいました。

それからは弘恵和尚さんの唱える光明真言というお経と鉦の音が七日間も一本の竹筒（空気がかよう）を通じて静かに静かに聞えていました。

とき、宝永七年（一七一〇）九月十五日といわれ、秋も盛りを迎えようとするころのお話です。

お話　故　小池　與　先生

外山の石碑

むかしの人々は高い山そのものを信仰の対象にしていました。蓼科山や霧ケ峯や御嶽山がそうでした。

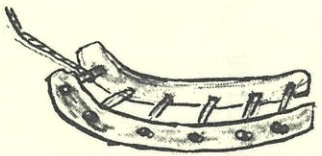
村にも木曾の御嶽山を信仰する人達が大勢いて、毎月毎月御嶽山に登りました。年に十二回も登らなければなりません。みんな仕事が忙しかったので月の終の夜登山して、月の初めの朝、山の峰に立つと六回の登山ですみました。つまり一回の登山で二ケ月分のお参り

をすませました。

けれども村から木曾まで行くことは大変なことでした。そこで信者の仲間が相談し、村の南にある三角に尖った外山の峰に霊神碑を建てて、お祭りし毎月お参りすることに話が決まりました。

みんながお金をだし合って長さ二メートル、巾一メートル、厚さ三十センチメートルもある大きな石に「八海山」と堀り込んでもらいました。大きな碑ですから外山のてっぺんまで持ちあげることは大変な仕事です。大きなソリを作り乗せて運ぶことになりました。

ソリの先に綱を付け、みんなで引っぱりました。「そーれ頑



張って引いとくれ。ヨイトコサ、ヨイトコラサ。」みんなが力を併わせたのでだいぶ引きあげられ八合目まできました。

これからが大変です。山は切立ったように急斜面になり、どうしても引きあげることができません。いっぺんにつかれが出てみんな座りこんでしまい身も心もつかれてどうすることもできません。

途方にくれていたとき、御嶽山の方角からすずしい風がすーっと吹いてきました。しかもその風に乗って「ソーレみなさん引いとくれ。」と、すず虫のような、それは美しい声が聞えてきました。

みんなが声のする方を見ると、八才になる子守の娘の声でした。しばらくうっとりと聞きほれていると、くたくたにつかれていた全身がピリ

ッと引きしまるのを感じ、なんとなく力が湧いてきました。

一人が立ちあがって「さあ引こう。」と、いうと続いて「ヨーシ。」俺もというように全員が立ちあがり綱を持つと、待っていたように美しい声で、「ソーレ　ソーレみなさん引いとくれ。」とかけ声がかかりました。

「ヨーイトコサ、ヨイトコラサ。」急な山坂もみんなが力をあわせるとたちまちソリは山のてっぺんに引きあげられてしまいました。

無事に碑が建ちました。誰れがいうともなく「きれいな声のお子守さんのおかげだ。」「そうだそうだ。」お礼をいおうとしましたが、子守の姿はどこにも見あたりません。キツネにでもつままれたように不思ぎに思

いながら顔を見合わせていました。

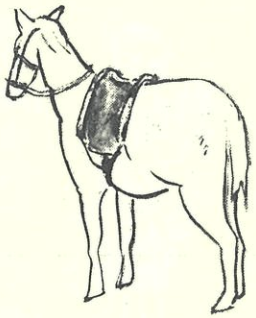
すると、はるかかなたの御嶽山の方角の雲間から涼風に乗って「みなさんありがとう―。お元気でサヨウナラ―。」それはなんとすず虫のように美しいお子守の子供の声でした。

その声に向かって、いつのまにかみんな合掌していました。

お話　柳澤　新次さん

立岩の駒形

その日は濃い霧が降る日でした。むかしは人通りのすくなかった滝ノ



沢の山道をまだ幼い少年と少女が馬に乗ってやって来ました。

少年が兄で栗毛の駒に乗り、少女の妹は白駒でした。霧はますます深くなり一寸先も見えないほどですから、少女は先を行く兄の姿を見失しないそうになり、そのたびごとに「おにーさあーん。」と声をかけると、「おーい、こっちだぞー。」というように兄妹は助けあいながら山道を進んでいました。

ところが突然先を行く兄の「わあーっ」という、すごい叫び声がしました。少女は、はっとして、「おにいさまー、おにいさまー。」と何回も呼びましたが、返って来るものはこだまだけでした。しかたなく声のした

方角に駒を進めると、少女のからだは駒といっしょにふわっと宙に浮きました。「あ、あー。」という少女の声が消え去らないうちに、まっさかさまに深い谷間に落ちてしまいました。

それは、高さ数十メートルもある依田川の岸に起立する岩のいただきから転落したのでした。……それから、どのくらいたったことでしょうか。「おーいあれをみろ、お姫様が河原で白い馬に抱かれてねてるぞ。どうしたことずら。」「あっ、あれもおかしいぞ。岩んとこへウンマ（馬）の形がついてるぞ。」少女は村人のざわめきで気がつきました。不思ぎなことに身は、けがひとつありませんでした。

しんせつな村人に助けられた少女は、今までなかった岩の駒形の話な

ど聞き「日頃信仰する仏様と兄がわたしの身がわりになって助けてくれたのです。ほんとうにありがたいことです。」といいながら、しばらくの間、岩についた駒形に合掌しお祈りをしました。

しばしの合掌を終えた少女は「わたしたちは、ある所の土豪でしたが、父が防人に召されたあと、わたしたちがちいさかったので手代の中に悪い人がいて、家も土地も取られてしまいじゃま者あつかいされ、しかたなく、いつもだいじにしていた馬に乗りただひとつの望みの防人に召された父をたず

ねて旅を続けここまで来ましたが、また不幸が重なりました。」と傷ついた白駒の介抱をしながら身の上話を続けました。少女の品位やその美しさにひかれて村人達はうなずきあいました。

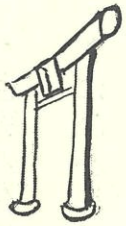
ちょうどこのとき、旅の身仕たくも十分な一人の武人が数人の手代をつれて通りかかり、村のさわぎに駒を止め「なにごとです。」とたずねて馬をおりました。村人から話を聞き近よって少女をひとめみた武人は、「姫ではないか」。と言ってかけ寄りました。その声を聞き顔をみあげた少女の口からは、いがいにも「お父様。」ということばがでました。二人は、一日もわすれることのできなかった親子だったのでした。

姫から郷里の話を聞き、長男の弔をねんごろにすませた父は村人に、

「わたしはこの地に住んで村を発展させたい、みんな協力してくれ。」とおねがいしました。

立岩の人達はみんなしんせつな人達でしたから、「お武家様。」「お姫様。」といって協力してくれましたので、田を作り畑をたがやし道を開き、馬を飼うために牧場を創りました。

岩に不思ぎな駒形がつき、たくさん馬が飼われ村が発展したので、みんなが駒形岩と呼ぶようになり、岩のうえに駒形神社をお祭りしました



ので、村はどんどんひらけ、とても豊かで住みよい村になりました。

お話　森田岩男さん

与惣塚

木曾義仲は依田城（丸子町）に兵を挙げ、横田河原の一戦で越後軍を破り、その後も破竹の勢いで北陸道を進撃し、礦波山（倶利伽羅峠）の戦で十万の大軍を火牛の奇計で打ち破って京に入り、旭将軍と呼ばれました。

このときほど信濃の武士が一致協力したことは、信濃の歴史にもありません。たった十三日間でしたが、義仲は征夷大将軍となりました。

ところが残念にもその年は凶作で食糧の供給が充分に行われず、木曾

軍はたちまち飢え、兵士達は民家に押し入り食糧を奪ったりしたので都の人々にきらわれ、暴状が原因となり同族の頼朝との友好が決裂し、六万余騎の鎌倉軍によって、撃破されてしまいました。

残兵をまとめ北陸に行って、再挙を計ろうとした義仲も近江の粟津で戦死してしまいました。とき、寿永三年（一一八四年）兵を挙げてから四年、三十一才の若さでした。

このとき、義仲にしたがった家臣に今井四郎兼平がいます。兼平の子

に与惣兼連という人がありましたが、この人は傴僂で体が弱く武士にはなれなかったので世に知られませんでした。

義仲と父兼平が戦死し、義仲の次子義重が信濃に落ちのびたのを知り、その後を追って、蓼科山を東に仰ぎみる、雨境峠の峰までやって来ましたが、体が弱いのに旅の苦労が重なって、病気になり、ついになくなりました。

やむなく、これにしたがって来た家臣たちによって、ここに葬られ、沢山な石を積みあげ、塚が造られたので、この塚を与惣塚と呼ぶようになりました。

（長門町に合併される前の旧大門村歌には「与惣塚首塚城の腰」という

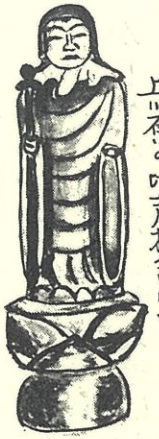
一節があります。この外佐久には禰津の殿様と高島城の姫君、佐久のお加代と諏訪の与惣という若者の恋の場所と、なかなかロマンチックな伝説が伝わっています。

数年前の発掘調査では古代から中世へかけて人々が目の前にそびえ立つ雄大な蓼科山に旅の安全を祈った祭祀遺跡だと結論づけられました。

お話　故　児玉司農武さん

上宿の観音碑と通夢

むかしの古町は、南信濃と北信濃を結ぶ重要な街道の宿場でしたから、



上川原の地蔵様（古町）

ずいぶんにぎやかでした。朝早くから起きて、隣りの宿場まで馬でお客さんを送ったり、荷物を運んだりしました。ですから馬をとってもだいじにしました。

馬が病気をしたり、けがをしないように、馬のお守りに馬頭観音の碑を村の入口に造ることになりました。みんなでお金を出し合って書道では近郷で有名な、四泊の慈福寺の住職で手習いを教えている、「通夢」という和尚さんにおねがいして、馬頭観世音と書いてもらうことになりました。

『通夢』和尚さんは、お経などはあまり読まないで毎日字ばかり書いて、

その日その日を楽しんでいました。村の代表数人が四泊の慈福寺に和尚さんをたずね、『ごっしやん、こんなわけで碑を造ることになりやした。達筆なとこでおねがい申しやす。』といって、お礼のお金も前金で差しだしました。

『いいともさ、よしよし。』和尚さんはきがるに引き受けました。

一ケ月が過ぎ二ケ月たちました。けれども和尚さんからはなんの返事もありません。『くそぼうず、礼金だけ受け取りやがって、だまかしやがった。』村人達はかんかんにおこりだし、『頼みに行ったおめーた

のせいだ。』村の代表の人達までさんざんでした。

仕かたなく村の代表数人がそろって再び四泊の慈福寺をおとずれ、和尚さんの顔を見ると、あいさつもそこそこに「ごっしやんひでえじゃーごわせんか、書くといって引き受けといて、どういうこったね。」村の代表の人達は、和尚さんに、くってかかりました。

「なんのことでごわす。」和尚さんは、おちついたものです。村の人達は、ついに、頭に来たとばかり大声で和尚さんをどなりつけました。村人達のわめき声をじっと聞いていた和尚さんは、静かに口を開きました。「わしも書いては、いるわさあ。」といって席を立ち部屋の片すみに置いてある長持の蓋を取り除きました。

長持の中には、どれも「馬頭観世音」とかいた書がぎっしりとつまっていました。「わしの気に入ったのが書けねえだけだおさ。」和尚さんのひとことで今までいきり立っていた村人たちは、ほうほうのていで村に立ち帰りました。

それからどのくらいたったことでしょうか……。和尚さんから届けられた書を用意してあった大きな石に刻んでもらうと、流れるような美しさと、雄こんな筆の運びにみんなの人が目をみはりました。

建てられてからずっとのちのことですが、加賀百万石の殿様が行列でお通りになったとき、わざわざお籠のすだれをあげ、「田舎にもこんなすばらしい書家がいるのか。」といわれ、村人に通夢道人のことをお聞きになったそうです。

お話　龍野和成先生

西蓮寺のはじまり

白鳳時代のことと言われていますから今から千三百年も前のお話です。

伊那の里の本田善光と言う人が国司とともに

に都へのぼったときのことでした。たまたま難波（今の大阪）を通りました。むかしから水の都といわれたところですから水路が多く、いろいろな船が通るのに便利でした。堀江といって陸地を掘って作った水路が従横に作られていました。

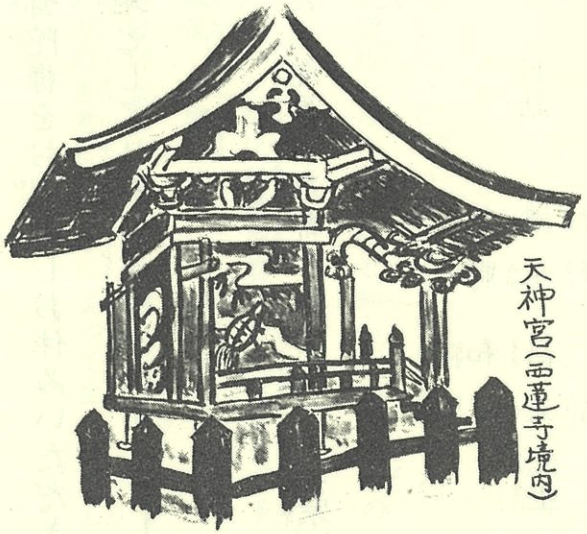
堀江を通りかかると水底から「善光、善光。」と呼ぶ者がいました。驚いて、立ちどまると、いきなりなにかが背中に飛び移りました。それは一光三尊の阿弥陀如来様でした。

善光はそのまま仏様を背負って信濃へかえり、自分の家のうすの上に安置しておきましたが、麻績の里（今の飯田市郊外）に草堂を創り仏様を安置したのが座光寺のはじまりだそうです。

そのご、仏様のおつげによって水内郡芋井の里（長野市）へお移しすることになりました。南信濃の伊那谷から北信濃の芋井の里へ行くときは大門峠をかならず通りました。峠を越えた一行は四泊を経て長窪まできて依田川のほとりで休息することになりました。

その頃の長窪は古町と長久保がいっしょの村でけっこう人通も多く栄えていました。

長窪村の前を流れる依田川のほとりにありがたい一光三尊を安置し、



天神宮（西蓮寺境内）

しばらく休息したのち先をいそぎ芋井の里に向って出発して行きました。

芋井の里に善光寺様が建てられ、善光寺信仰がますます盛んになり全国に知れわたるようになると、むかしから善男善女が多かった長窪の人達がみんなで話し合ってありがたい阿弥陀様をお迎えしお休みいただきそしてお送りした依田川のほとりを聖地として仏教の道場が開かれました。

はじめは小さな道場でしたが、だんだん発展し京都の知恩院（浄土宗）と言うお寺の末寺、西蓮寺になりました。

お話　龍野和成
清水昌夫先生
倉澤猛

あとがき

数年前から先人が残した宝ものをなんとか形にして残したいと思い折をみて採録しました。かけ出しのわたしに多くの先輩や同僚から是非本にしろと勧められ身のほど知らずにも出版のはこびとなりました。

「こうしたほうがいいぞ。」といって資料を提供してくださった文化財調査委員の先生がた、多忙なのに「表紙」、「口絵の題字」を書いてくださった鳳悦、翔雲両先生、出版一切のお世話をくださった教育委員会のみなさん、職場でのみなさんのはげまし、ほおっておいた家事一切をだまってしてくれた今はなきおやじ、ほんとうに大勢の方の善意と御協力によって生まれました。厚く御礼申しあげます。

昭和五十三年二月

ふる里長門のやまなみが見える新設の職場にて

児玉断

お断わり　予約にわたる発刊のご案内では採録者の自筆により発行する予定でした。ところが青少年の読み物としては正確な文字でなければならないと考え活字発行いたしました。

長門昔ばなし

昭和53年２月１日

採録者　児　玉　　断
発　行　長門町教育委員会
住　所　長野県小県郡長門町長久保
電　話　02686(８)2127
印刷所　信毎書籍印刷株式会社